

1 日常の学習における課題分析

<技能>

休み時間の児童の様子を見ると、校庭に出て外遊びを楽しみ運動する児童とあまり遊ばず運動をしない児童の二極化現象が生じている。その結果、日常生活の経験の差が、体力(能力)の差となって表れている。走・跳の運動、投げる、捕るなど体の基本的な動きにおいても児童の得手不得手は顕著に表れており、運動感覚や体力の低下が見られる。

<関心・意欲・態度>

「体育の授業は好き」という児童は多い。

<思考・判断>

児童はルールを考えたり、運動を工夫したりする活動を協力してできるようになってきているが、健康や安全について、関心はあっても、日常生活を振り返ってそれを確実に理解している児童はあまり多くない。

2 授業改善の方策

【指導計画】

学習指導要領の改訂により、低学年の授業時数が105時間に増加したことや、全学年に体づくり運動が新設されたことなどを受けて、各学年の指導計画を再編成する。児童の心身の発達や特性を考慮し、小学校6年間の見通しをもって指導計画を立てることが大切であるため、運動の特性に系統性を見出し、それに基づいたものを作成する。なお、低学年においては体づくり運動の充実を図ると共に、増加時数を生かして他の領域に関してもより充実した指導計画を編成できるようにしていく。

◎ 言語活動の充実

集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育むとともに、運動やゲームの練習や作戦を考え、その改善の方法などを児童が互いに話し合う活動を大切にする。

【指導方法】

運動感覚や体力を高めるためには、体をたくさん使い、児童が思い切り運動できるような活動・遊びを授業に多く取り入れていくことが大切である。「体育が苦手」だと思う児童はその運動をするにあたっての必要な運動感覚が不足しているからである。

そこで、活動を工夫して行うことができる簡単な場、簡易化されたルール、力一杯活動できる時間の確保はもちろんのこと、運動の特性にふれて、今もっている能力を発揮しながら活動に取り組むことで、「運動することが楽しい」と実感し、体育を楽しむことができるようにする。

運動の特性にふれた活動が体力の高まりを感じることに繋がったり、運動そのものの楽しさを味わったりすることができることを考え、低学年から多様な運動遊びを取り組めるような授業展開を計画し運動感覚を培っていきけるようにする。そのためには、児童の心身の発達の特性を考慮して授業を展開していくが大切である。また、授業の中で一人一人が自らめあて(課題)をもって取り組み、その課題が達成できるような学習を展開し、その学習成果を的確に評価することが大切である。そのことが児童にとって次のめあてを明確にもつことにつながる。つまり学ぶ喜びを味わわせる体育学習を実践することが重要である。以上のように、指導と評価の一体化を図り、展開していくことが求められる。

- ・教材研究
- ・スモールステップの授業
- ・学習カードの活用
- ・教師の声かけ
- ・ルールや場の工夫
- ・児童のかかわり合いの充実
- ・満足感や達成感が得られる授業
- ・十分な運動量の確保できるような授業
- ・楽しい体育

3 補充的・発展的な学習指導

段階的な場を用意して場に応じた具体的な運動のめあてを明確にもてるようにし、個の能力に適した場で運動するとともに、体力の高まりを実感できるようにする。

また、体育的活動を通して多様な運動経験を構築したり、授業の中で運動の日常化につながるような学習を展開したりして、運動する機会を増やすきっかけづくりを行っていくようにする。

健康・安全面については、発達段階的に計画的に指導していき、日常生活に生かせるようにする。